中村博男著『松浦武四郎と江戸の百名山』

河治 和香著『がいなもん　松浦武四郎一代』

松浦武四郎を知ったのは、30 年以上も前の事です。
その頃は北海道を探検し、綿密な地図を作り、アイヌの人々の生活文化を調査した探検家という印象しかありませんでした。

先日、世田谷の静嘉堂文庫美術館の武四郎の生誕 200 年記念展に行ってきました。そこでは三菱の二代社長の岩崎小弥太と四代社長の弥之助が武四郎の死後一括購入した約 900 点のコレクションを展示してありました。勾玉や古銭や古物のコレクションには驚きました。北海道の克明な地図もありました。

一つ一つのアイヌのコタンに行き、このコタンの長はだれ、家族の氏名まで一人一人聞き取り調査してあるのです。それが地図にびっしりと書き込んであるのです。まさに地理学者です。

登山家としての武四郎のことは「松浦武四郎と江戸の百名山」を読んで初めて知りました。北は樺太、千島から南は九州鹿児島まで日本のほぼ全土に足を伸ばしています。しかも全ての旅の登山体験をフィールドノートに残しています。名山と称される高い峰に登った記録もあります。

江戸時代の登山家といえば播隆上人が有名ですが、播隆上人は笠ヶ岳と槍ヶ岳という限られた山しか登っていません。武四郎は日本を旅しながらその地方の名峰を次から次へと踏破しました。

ちなみに深田 100 名山の中に彼が登った山は 20 峰もあります。
御嶽山、金峰山、富士山、石鎚山、剣山、大山、阿蘇山、霧島山、祖母山、磐梯山、蔵王山、月山、鳥海山、赤城山、岩手山、石狩岳（大雪山）、後方羊蹄山、大台ヶ原などです。

また信仰の山にも多く登っています。深田 100 名山とかぶりますが、戸隠山、御嶽山、那智山、高野山、七面山、身延山、富士山、石鎚山、剣山、大山、湯殿山、月山、羽黒山、鳥海山、恐山、朝熊山、三峰山などです。

何故このように山を登ろうという気持ちになったのか不思議です。武四郎は伊勢の生まれ。自伝に「好んで名所図絵などを読んでいた」と書いています。武四郎の山への思いは「名所図絵」1780 年や「日本名山図絵」1812 年などに影響されたものでしょう。自宅の前が伊勢街道でお伊勢参りの参拝客が通る道だったことも諸国行脚に行きたい気持ちをかき立てたのでしょうか。一度目の旅は16歳での家出。江戸へ約 2 ヶ月行きました。二度目の旅は 10 年に及びました。路銀はどのように工面したのでしょうか。例えば大阪では大塩平八郎の塾に入り、塾生として慰留されたり、長崎では出家して寺の住職を 3 年間務めたりと様々なことを行っています。

70 歳で富士登山を行い、亡くなる数年前に終活で大台ヶ原に自分の墓を作らせたそうです。当時の大台ヶ原は人も寄りつかない秘境のような所だったそうで「優婆塞（うばそく）もひじりも　いまだ分け入らぬ　深山の奥に　我は来にけり」という詩を残しています。
優婆塞とは役の行者、ひじりとは弘法大師。このような凄い人たちも未だ来たことのない山奥に私は来ているのだと自賛しています。

また、終活の一つで「一畳敷の書斎」を作らせています。武四郎はこの狭い書斎が気に入っていたよ

うです。この書斎は全国各地の有名な寺社仏閣・橋などを壊したときの古材を使って作られています。廊下の柱は伊勢神宮の式年遷都の古材。地袋板は太宰府天満宮の床板。棚板は法隆寺の古材。京都・渡月橋の橋桁などなど９１もの古材を使っているそうです。遺書の中に「この古材を使って自分の遺体を焼くように」と書いてあったそうですが、遺族の反対により実現しませんでした。「一畳敷の書斎」は今でも現存しているそうです。何故か今は、三鷹市のＩＣＵキャンバスの庭園内にあるそうです。71 歳で明治 22 年に亡くなりますが、彼の生き方をみていると身長１４８ｃｍの小さな巨人と言ってよいでしょう。

2018 年は武四郎が生まれて 200 年。時間があったら世田谷の静嘉堂文庫美術館の武四郎の生誕 200 年記念展に行かれることをお奨めします。

「松浦武四郎と江戸の百名山」　2006 年 10 月刊　平凡社新書　700 円
「がいなもん　松浦武四郎一代」2018 年 6 月刊　　小学館　　1,836 円

2018 年 11 月 8 日（深澤　裕）